

崇高な行為に感動

—— 炎からわが子を守った母親ポーラ ——

中国古代の思想家荀卿は、「天地の異変並び起こるといえども恐るるに足らず、人妖こそ恐るべし」というようなことを言っております。まさに、この夏は、荀卿の言葉通り、地震と雷、驟雨と洪水という天災地変が並び起こったのですが、それよりも恐ろしかったのは、デトロイトのメトロポリタン空港近くでおきた米旅客機の墜落炎上という人妖でした。

一瞬にして一五〇余名の尊い人命を失ったのですが、事故現場では、遺体や機体が七〇〇メートル四方に散乱して、さながら原爆が落されたような惨状であったと言われております。ところが、この大惨事の中で、一人の幼女が奇跡的に救助されたのです。その名はセシリアち



平成5年1月学内成人式式辞風景

やん。墜落炎上中というその瞬間に、母親のポーラさんが、セシリアちゃんを抱きかかえ、熱と炎から守ったというのです。「自分の生命に代えてセシリアの生命を救った母親ポーラこそ真のヒロインです」とは、駆けつけたポーラさんの父親、アンソニーさんの言葉です。

私は、この米旅客機事故に、改めて人妖の恐ろしさを感じたのですが、わが子を抱きかかえて、熱と炎から守ったポーラさんの親心に胸の熱くなるのを覚えました。そして、二十数年前に、学園長国信玉三先生が、田舎のバスの中でお聞きになったというお話しを思い出しておりました。そのお話しとは、牛小屋の火事についてのことなのです。牛は、赤い炎を見れば、興奮して暴れ、逃げるのですが、その時、その牛は子持ちの母牛だったので。母牛は、炎と煙の中でも、子牛を腹の下に抱きかかえ、背中に火がついても、ついぞ逃げようとはせず焼け死んだ、というのです。私は、この母牛の子牛を思う心情に心打たれたものですが、しかし、このたびのポーラさんのわが子を思う親心には、崇高なまでに尊いものを覚え、感動致しました。

私たちは、誰一人として親の無いものではありません。親があつて私があるのです。親の限りない大きな慈しみを受けて今日の私があるのです。この限りなく大きな慈悲深い親心に、どのようにして報いることができるでしょうか。それは、その親心を心として、家族に、そして隣人に、慈しみの心を及ぼし、感謝の生活をする事です。万人に対し、感謝の心で生きること、それが、親心に応えることだと思えます。

米旅客機事故で見たポーラさんの崇高な行為に、私は、改めて親心の尊さを覚え、ここにペンを走らせた次第です。 合掌

天水だより（昭・62・10・20）